

東大見学会レポート

今回の東大見学会・企業大学訪問では、様々な人と出会い、様々な貴重な経験を積むことができました。ディレクトフォースから始まり、企業大学訪問、東京大学院生・学生(仙台二高OB・OG)による懇談会、そして東京大学オープンキャンパス。それら全てが、普通ならば一生に一度あるかないかという、二高の東大見学会・企業大学訪問だからこそできたことばかりでした。

ディレクトフォース・企業訪問研修では、新日鐵住金株式会社を訪問させていただきました。ディレクトフォースの中には、グループごとにディスカッションするということが組み込まれていました。私は、そのディスカッションをしてみて、自分は自分の考えを短時間でまとめて相手にわかりやすく伝えることができていない、と思いました。1人で焦って考えをまとめることができず、ただ思いついた言葉を並べるだけで、あれでは相手に伝わらないな、と強く思いました。

私は人見知りな性格もあって、今まで人前で自分の意見を述べることを、出来るだけ避けてきました。しかし、今回のディスカッションを通して、自分の意見をわかりやすくまとめて発表する先輩方や企業の方々、そして仲間たちの姿をみて、私もこんな風になりたい、と思うようになりました。とはいっても、すぐにそのように変わることは、私にとってはたいへん難しいことです。だから私は、普段の授業でのディスカッションの場や、現在取り組んでいる第41回全国総合文化祭(みやぎ総文2017)生徒企画委員会での話し合いの場などを通して、少しずつ慣れていき、変われるように頑張りたい、と考えています。

企業大学訪問では、協和発酵キリン株式会社・東京リサーチパークを訪問させていただき、研究所の方々のお話をうかがったり、施設内を見学させていただいたりしました。協和発酵キリン株式会社では、医薬品の研究・開発・製造から販売に至るまでのプロセスが、あらゆる技術や知見、ノウハウを統合し、それらを最大限に活かせるように、6つの段階にわけられています。今回私たちが訪問させていただいた東京リサーチパークでは、その6つにわけられたプロセスのうち、「創薬基盤研究」と「探索研究」を行っていました。

私が訪問させていただいて、特に印象的だったことは2つあります。

まず1つ目は施設についてです。研究所の方のお話によると、2010年に「機能的で柔軟性のある次世代研究棟」をコンセプトとして竣工されたばかりらしく、新しく、最先端の設備が備えてあり、また、研究の発展のための工夫がたくさん凝らしてありました。例えば、レベルが高く1人1つは与えられないような高価な機器を1つの部屋に集めることで研究の効率を良くする工夫が凝らされてありました。また、試薬やサンプルを持って通ることもある実験室と実験室の間はもし薬剤などがこぼれたとしてもすぐに拭きとれるような床材を用いているという工夫もありました。このように様々な場所に様々な工夫が数多く凝らしてある施設でした。そんな中で、私が最も驚いたことは廊下に大きなホワイトボードが設置されていたことです。研究所の方のお話によると、東京リサーチパーク施設では「コミュニケーションをより活発にすること」を目指して竣工されたそうです。もし廊下で研究員同士でディスカッションが盛り上がり、何かを書いて説明しあいたいとなったときに、ホワイトボードが廊下があれば、そのままディスカッションを続けることができます。また、研究所の廊下には、ホワイトボードのほかいくつかの机やイスも設置されていました。このようにすることでオフィス内では出来ないような話し合いや、研究グループを超えた話し合いをもっと活発にし、多くのコミュニケーションをとることで、新たなイノベーションを生み出そうとしているそうです。私は研究を発展させ、より良い新薬を、より早く発見し、そり多くの患者さんのもに届けようとしている協和発酵キリン株式会社の姿勢が、研究所の見学だけでこんなにも強く感じられたことに非常に感嘆しました。

そしてもう1つ、私が特に印象的だと感じたことは1つの薬を創るのに10年以上の歳月をかけて、100人もの人が携わり、数100億もの資金をかけている、ということです。携わる人の人数は、人体実験に協力して

いただく方々の人数も含めると、1000人以上になることもあるそうです。薬を創り上げるということが大変なことであることは何となく理解していたつもりでしたが、私が想像していたよりも遥かに、薬を創り上げるということは大変なことなのだと思います。私たちが普段何気なく服用している薬が私たちの手元に届くまでには、たいへん多くの方々がそれぞれ熱い想いで創り上げようとしてきた努力の結晶なのだと思うと、小さくて軽いはずの薬が、ずっしりと重く感じられました。

東京大学院生・学生(仙台二高OB・OG)による懇談会では、3人の先輩方からお話をうかがいました。

先輩方のお話をきいて私が感じたことは、私が今真っ先にすべきことは自分の目標を明確に定めることだ、ということです。

どの先輩も、非常にレベルの高い大学に通っていて、決して楽な生活をおくっているわけではないはずです。それなのに先輩方が自分のことをとても楽しそうに語ってらしたのは、自分はこの目標のためにこんな努力をしている、ということ自分をハッキリと認識しているからなのだと感じました。

私はまだ、自分の将来の目標が明確に定まっていません。正直、二高に入学してレベルの高い仲間たちと関わってれば、自然と定まってくるだろうと思っていました。しかし、先輩方のお話をきいて、目標とはただ何となく過ごしていて見つかるものではなく、自分が自分を掘り下げて考えていくことでようやく見つかるものなのだ、と気付かされました。

将来の目標が定まれば、そのために目指すべき大学が定まります。志望する大学が定まれば、そこに合格するために必要な条件がわかります。合格に必要な条件がわかれば、それに向けて今自分がすべきことが定まります。このようにして目標という明確なゴールを定めることで、それに至るまでのステップが明確になり、今自分がすべき努力を続けることができます。また、さらにそれは「自分はこんな目標のためにこんな努力をしているのだ」という充実感を味わえることにもつながり、自分に自信をもつことにもつながるのだと思います。私も先輩方のように自分の目標を明確にもち、先輩方のようにいつか自分のことを自信をもって楽しそうに語れるようになりたいと思います。

「自分の視野を、世界を、可能性をもっともっと広げてほしい」

「柔軟な若いうちに様々なことにふれてほしい」

「ミスを大事に」

「汝、何のためにそこにありや」……

今回の東大見学会・企業大学訪問では、様々な先輩方から様々なメッセージをいただきました。新幹線内で配布された若林先生からのメッセージが書かれたプリントの中に「実り多き行事になるかどうかは、各自の行動次第である」という言葉がありました。その言葉の通り、私が今回の東大見学会・企業大学訪問という行事を実り多きものだったと胸を張って言うためには、今回私が先輩方から受け取ったメッセージを、これからの自分の人生にどう活かしていくのか、ということが重要なポイントになると思います。私は今回受け取ったメッセージや、発見した課題をこれからの自分の人生にどう活かしていくのか、模索していきたいと思っています。